

## 国際的な大学教育の質保証 (教育、学術および文化の国際交流事業)

九州看護福祉大学学長 二塚 信

近年、看護学領域の国際交流は著しく活発になっている。この事業では、看護学の教育・研究において、欧米の看護学教育、特に看護系大学の質の評価やヨーロッパを中心とする教育カリキュラムの標準化などの動きに注目し、情報を収集し、活用・公開すること、医療における看護師の役割・権限、専門性について、その現状及び動向を把握すること等、多くの課題がある。

### 開催の趣旨

近年、看護学を含め私立大学の増加は顕著なものがある。他方、臨床現場からは実習の場面や就労後における看護職の質の低下が問題視されている。文科省、厚労省等の行政においても、大学教育の質の保証について厳しい目が向けられている。中教審の大学分科会においても、総会の金沢工大黒田寿二総長の講演にあったように、質保証システム部会が設置され議論が活発に行われている。国際的には、OECDが学習成果の明確化を図る為に高等教育に対するフィジビリティ・スタディを予定し、日本はこれに参加することが決定している。また、EUのボローニャ・プロセスでは、EU域内では大学間の単位互換が可能という国際的な通用性を日本にも受け入れるよう求めている。

この研修会は、このような国際的な視野にたつて、大学教育の質保証の現状及び将来の展望について共通の理解を持つとともに、看護教育のアドミッション・カリキュラム・ディプロマポリシーの各大学における問題意識を持って向上・発展していく為の情報を共有するために企画したものである。

日 時：平成22年9月2日

場 所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

### プログラム

会長挨拶 私立看護系大学協会会長

近藤潤子（天使大学学長）

担当理事挨拶 二塚 信（九州看護福祉大学学長）

講 演

1. グロバリゼーションと大学の質保証

桜美林大学大学院教授 田中義郎氏

2. 欧米の看護教育の質保証

北里大学看護学部

日本看護大学協議会

看護学教育評価検討委員長 高橋真理氏

司会 二塚 信

尾瀬 裕（吉備国際大学看護学科長）



## 開催の趣旨

## グローバル化と大学の質保証

田中義郎氏

グローバル化をどのように捉えるのか、これは3つの有用性がある。戦略的国際連携、共通単位（工業製品等々も含めて）、国際的ロビー活動である。小中学生を対象としたPISAがよく知られているが、これはEU全体として人材確保の為の指標の一つである。ボローニヤ・プロセスの中では、フランスの場合、2020年までに16歳から24歳の学生の50%を国外のEU諸国での学習機会を保障する。大学院では100%の国際流動性を実施するという目標がある。例えば留学先を見ると、アジアの人々は北米に40%、欧州に32%、アジア28%、アフリカの人々は北米に20%、欧州に77%、アジアに3%である。これはどこで教育を受けたかということが、プロフェッションの世界に大きな影響を与えることを意味している。ボローニヤ・プロセスで強調されていることは、外国での学びを体験し、多面的な教育に身を晒し指導をうけることで、グローバル化とローカリゼーションを同時に体験することの重要性である。アメリカや欧州の多くの国々ではポリテック・アドミッション総合評価ということで、教育の理念や目標を共有することで、カリキュラムの共有、プログラムの標準化、共通単位移行制の前提に中等教育の修了試験により、最低学力が担保されている。アジア太平洋地域でもユーマックという大学連合の動きがある。

国際化と質保証の点で留意すべきは次の問題である。①移動性の問題②持続可能性の問題③平等性の問題④学習・労働意欲の問題⑤収容可能性の問題⑥質の問題である。

（文責：九州看護福祉大学 二塚 信）

## 米国の看護教育の質保証

高橋真理氏

アメリカの高等教育のアクレディテーションは2種類ある。1つは教育機関別アクレディテーションで、もう1つは専門分野別アクレディテーション

である。認証評価を受けるのは義務ではないが、受けることによって奨学金などの様々な特典があり、州によっては資格試験の受験資格等と連動している所もある。

看護学領域のアクレディテーションとしては、大きく2つあり、全米看護連盟の内部委員会としてのアクレディテーション委員会（NLNAC）と大学看護教育委員会（CCNE）がある。前者は専門職業資格プログラムから学位、学士、修士まで様々なプログラムの認証評価をしており、後者はアメリカ看護大学協会（AACN）が設立し、AACNからは独立して、学士以上の学位プログラムの認証評価を行っている。CCNEアクレディテーションが米国看護大学の看護の質の保証が主な目的である。大学はCCNEの評価を受けることによって、継続的に改善活動に取り組み、ひいては看護専門分野領域全体の質向上へとつながっていく。

CCNEの認定校であるかどうかというのが受験生を得ることなど、大学の評価全てに関係してくる。CCNEの組織は、理事会があって、13名から構成されており、ディーン、教員、専門消費者、一般消費者、看護師の各代表が2、3名ずつである。事務局員9名の大半が看護学を専門とするドクターまで持っている。CCNEが認定する看護学のプログラムは、ほとんどが総合大学である。

評価のプロセスとして、まず申請前にワークショップの受講があり、自己申告書に基づいて申請する。それで実施調査と書類調査、審査、勧告の三段階に評価がなされる。勧告結果が公表されてから次までに例えば10年あったら、その真ん中で中間評価を行うことになっている。その教育内容などのベースとなっているのがAACNのガイドラインESSENTIALSで、その日本語訳が「平成21年度大学における医療人養成推進等委託事業」の最後に載せてあり、各大学に配布している。

我が国の看護系大学の質保証としては、日本看護系大学協議会看護学教育評価検討委員会では、大学機関別認証評価と専門分野別評価を分けていくことが必要と考えている。今後看護系大学の学士課程・大学院・専門職大学院の教育の質を高い水準で保証するため、どのような評価組織を構築していくのか検討が必要だと思っている。

（文責：吉備国際大学 尾瀬 裕）

# 理事会報告

## 平成22年度 第3回理事会報告

日時：平成22年11月20日（土） 13：00～16：30  
 場所：日本私立看護系大学協会事務局  
 （市ヶ谷 千代田ビル405号室）  
 出席者：14名 委任状5名（全役員数21名）

### 報告事項

1. 各事業活動代表理事より、平成22年度事業活動経過報告が行われ、承認された。
2. 研究助成事業の「国際学会発表助成」に関し、応募した学会発表を行わなかったという1名の授賞を取り下げ、3名ではなく2名の授賞者としたとの報告があり、承認された。
3. 平成23年2月7日（月）午後1時から、臨時理事会と将来構想検討委員会を合同で開催することとなった。
4. 経理に関し、公認会計士と契約し、年最低2回の公認会計士による会計監査を行うこととした。また公認会計士の指導に準じた収支決算書表等を作成するとともに、総会では移行期として、従来の様式と2種類用意することとなった。

### 審議事項

役員選出に関する内規を作成することとし、資料説明の後話し合われた。事業活動における「ブロック制の導入」の“ブロック”と、役員選出における“ブロック化”とは別という意見等が出され、引き続き臨時理事会で検討することとなった。

## 平成22年度 臨時理事会報告

日時：平成23年2月7日（月）13：00～16：45  
 場所：日本私立看護系大学協会事務局  
 （市ヶ谷 千代田ビル405号室）  
 出席者：18名 委任状3名（全役員数21名）

### 審議事項

将来構想委員会と合同で開催された。

1. 将来構想委員会で昨年行ったアンケート結果の報告があった。  
 看護系私立大学の魅力をアピールする必要がある、今後の私立看護系大学の増加に鑑み、当協会には、「教育の質の向上」に取り組むことが求められている、この結果を基に中長期計画を立てたい。
2. 役員選出に関する内規について  
 23年度の役員交代については、従来の選出方法をほぼ踏襲しつつ、必要な条文を付け加えた「日本私立看護系大学協会役員選出内規」に基づき選出することとする。そして2年後の総会までには、理事選出の選挙制度を提示する

## 平成22年度 第4回理事会報告

3月19日（土）に開催予定だった平成22年度第4回理事会は、東日本大震災における交通機関の混乱等諸事情に鑑み、急遽中止し、書面理事会へと変更となった。



## 平成22年度事業活動報告書

## 「学術研究及び学術研究体制・研究助成に関する事業」

## 研究セミナー第一部

日 時：平成22年10月2日（土）10:00～12:00

場 所：東京ガーデンパレス

担当理事：島内 節、野川 道子、飯田 加奈恵

## 1. 全体目的

日本私立看護系大学協会の「学術研究及び学術研究体制・研究助成に関する事業」の一環として、看護学研究者の育成と、更なる向上発展を奨励するために、看護学研究奨励賞、若手研究者研究助成、国際学会発表助成という3つの研究助成事業を行っている。「看護学研究奨励賞」は優れた論文を発表し看護学研究に貢献した者に、「若手研究者研究助成」は看護学研究に取り組んでいる将来性のある若手に、また「国際学会発表助成」は国際学会に参加し優れた研究発表を行う者に対する助成であるが、いずれも学術に優れた9名の選考委員による査読と慎重な審議を経て受賞者を決定している。

助成対象論文については会報に要旨を掲載し、ネット上でも閲覧できるようにしているが、特に「若手研究者研究助成」の受賞者については2年間の研究期間を経た後に、その成果を発表する機会を設けている。本年度も10月2日に東京ガーデンパレスで開催された本事業の研究セミナーの第一部で成果報告会が行われ、平成19年度に「若手研究者研究助成」を受賞した6人の研究者による意欲的な研究の成果が報告された。

## 2. 参加者：90名

日本私立看護系大学の教員、研究者、事務職員



## プログラム

## 会長挨拶

日本私立看護系大学協会会長 会長 近藤潤子

## 第一部 研究成果報告会

研究助成事業担当理事 挨拶

北海道医療大学 野川道子

第1群 10:10～11:55

座長 杏林大学 飯田加奈恵

1. 10:10～10:25

「新生児に対する母親の応答性を高める看護介入の開発とその効果に関する研究」

北里大学 香取洋子

2. 10:25～10:40

「通所リハビリテーションが脳卒中維持期患者にとって果たしている役割」

日本赤十字広島看護大学 百田武司

3. 10:40～10:55

「重症心身障害児の治療の選択における看護援助について ～重症心身障害施設の実態調査から～」

聖路加看護大学 眞鍋裕紀子

第2群 11:10～11:55

座長 東京有明医療大学 金井一薫

4. 11:10～11:25

「思春期精神科患者をケアする若手看護師のサポートプログラム構築のための基礎的研究」

甲南女子大学（現大阪府立大学）郷良淳子

5. 11:25～11:40

「成人看護学演習から実習へと学生の看護実践能力の向上を促す効果的教育のプログラムの開発」

東海大学 庄村雅子

6. 11:40～11:55

「看護学生の病床環境観察に関する認知のメカニズム～眼球運動と思考過程による分析～」

埼玉医科大学 林 静子

（文責：飯田 加奈恵）

### 3. 研究成果報告会報告内容

#### 新生児に対する母親の応答性を高める

看護介入の開発とその効果に関する研究  
北里大学 香取洋子

先行研究においてローリスクの母子に介入プログラムを実施し、母親が応答スキルを獲得することで出産後早期から母子関係が促進されることが検証されたが、今回、プログラム以外の介入を必要としたハイリスク母子2事例について、プログラム内容・方法の改善について検討を行った。プログラム以外の介入を必要とした母子は、入院中の介入だけでは母子の応答がスムーズにいかない養育行動獲得におけるハイリスク事例であった。事例Aでは母親自身の技術獲得に時間がかかり、母親の歩みにあわせて回数を増やしステップアップしていく必要があった。また、事例Bの場合、実母との関係や出産体験によって母親のセンシティブティが十分発揮されていなかったと考えられ、子どもへの応答をサポートするとともに、情緒的支援の必要性があった。以上のことより、ハイリスク母子の場合において、母親の育児に対する肯定感や自信を高めていくには介入期間や回数を増やし、情緒的支援と組み合わせる必要があることが示された。

#### 通所リハビリテーションが脳卒中維持期患者に

とって果たしている役割  
日本赤十字広島看護大学 百田武司

【目的】介護保険による通所リハビリテーション（以下、通所リハ）という場が、脳卒中維持期患者にとって果たしている役割を、利用者の視点から明らかにすることを目的とした。

【方法】通所リハに通所している17名の維持期の脳卒中患者（75.6±11.31歳）に、半構成質問紙を用いた面接を実施し、分析は、質的帰納的に継続的比較を行った。また、分析結果の厳密性の検討のため、メンバーチェックを採用した。

【結果】脳卒中維持期患者にとって通所リハという場が果たしている役割は、<獲得した身体機能を守る場>、<健康を得る場>、<学びの場>、<習慣の場>、<社会と接する場>、<心配のいらぬ場>、<やっかい払いの場>の7つのカテゴリーに分類された。

【考察】<やっかい払いの場>は、他のカテゴリーが比較的ポジティブな役割を示していることに対して、ネガティブな役割である。つまり、脳卒中維持期患者にとっては、通所リハが必ずしも快い場でなく、やむを得ず通所している場であることも考えられた。

【結論】脳卒中維持期患者が、通所リハの役割を肯定的に意味づけられるように支援することが必要である。



#### 重症心身障害児の治療の選択における看護援助について ～重症心身障害施設の実態調査から～

聖路加看護大学 眞鍋裕紀子

【研究の目的】重症心身障害児に対する呼吸器などの医療の介入で親権者は、子どもの最善の選択を強いられるが、長期施設入所児の場合、生活の場が違い、健康状態の変化や医療の介入についてイメージを持つことが難しく、困難を要している。そこで施設勤務5年以上の看護師10名に、選択における現状や支援をインタビューによって明らかにし、選択におけるサポート方法の検討を目的とした。

【結果と考察】1回の説明では決定できなく選択は変わる事、子どもにとっての最善が決められない事、子どもを知る職員にも意見を求めている事、選択しない事を含む全ての方法と生活の変化や効果、リスクなど全ての可能性を含めた情報を必要としている事がわかった。前もって選択することの必要性を伝えられるが、悪化する事を考えられず、今生きている子どもが、選択に影響を与えている事がわかった。子どもと日常的に関わる人々と情報を持ち寄り、親権者と共に子どもの気持ちや生活を考え、親権者の支援者として決定に導かれるようサポートが必要であることが明らかとなった。

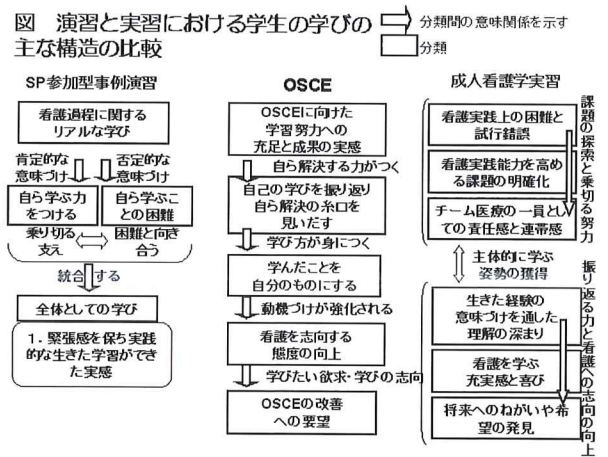
思春期精神科患者をケアする若手看護師の  
サポートプログラム構築のための基礎的研究  
甲南女子大学（現大阪府立大学）郷良淳子

本研究は、思春期精神科病棟における①患者や家族との関係での若手看護師の抱く困難、②①の困難への対処、③必要とされるサポートの内容、④サポートプログラムの骨子を明らかにすることを目的とした。データは児童思春期精神科病棟に勤務する若手看護師7名からの個別半構面面接によって収集した。データ分析にはMGT法を用いた。結果、患者の成長過程を理解することの難しさ、患者への手痛い批判、不適応行動の連鎖への対処への困難さ、家族との関わりの大変さ、患者の言葉に感情的に反応してしまうことが看護師の困難として分類された。このような困難に対して、看護師が看護スタッフそれぞれの役割を理解すること、わかってもらう存在になろうとすること、患者の言動を子ども視点から理解しようとする、そのために自らの思春期に体験を想起することが必要であった。病棟内のグループダイナミクス、子どもの発達や思春期特有の行動特性心理特性の理解を含め、看護師間のグループダイナミクスを読み解く力、これらの知識を統合していく力が必要とされ、このような内容を盛り込んだサポートプログラムの必要性が示唆された。

成人看護学演習から実習へと学生の看護実践能力の  
向上を促す効果的教育のプログラムの開発  
東海大学 庄村雅子

本学成人看護学領域では、看護過程と対人関係能力を育むSP（模擬患者）参加型事例演習と、看護実践能力を獲得するOSCE（客観的臨床能力試験）とによる実践的な状況設定下での演習後、実習を行っている。本研究では、以上の教育プロセスを通じた学生の学びと課題を明らかにし、成人看護学における演習から実習への教育プロセスを通じた学生の主体的な看護実践能力の獲得を促すための教育のあり方を検討することを目的とした。大学看護学科3年生約70名の2007年度の成人看護学演習と実習のポートフォリオ（各授業の終了時に学生自身に学びや課題を記述させたレポート）の記述をデータとし、質的帰納的に分析した。結果、演習でも実践に近い緊張感を持ち多様な学びが得られ、実習ではチームワークの発揮力がついていった。

看護を学ぶ喜びなど看護への志向の高まりは、演習でもみられ実習で強化されていた。演習と実習の比較からは、主体的に課題を特定し、チームとして活動したり、臨床を志向したりと、主体的な実践能力獲得に発展を認めた。以上から、演習と実習での振り返りを助けることが、継続的に学生の主体的な看護実践能力の獲得を促す要と考える。



看護学生の病床環境観察に関する認知のメカニズム  
～眼球運動と思考過程による分析～

埼玉医科大学 林 静子

本研究では、看護学生の環境整備時の眼球運動から注視部位・時間と、観察時の思考過程から認知のメカニズムを明らかにすることを目的とした。

【方法】対象は同意を得られた看護学生19名（1年生7名、2年生12名）期間：2008年3月。病床環境を設定しEMR-8B型を装着し観察を指示し画像データを記録した。観察後、画像データを見せ思考発話法の内容をICレコーダーに録音した。

【分析方法】画像データはEMR-dFactoryを使用し視線配置部位を空間的に分類し注視時間を解析した。発話内容は逐語録にし意味単位ごとにまとめ内容の類似性に基づき観察部位のカテゴリー化を行った。

【結果・考察】総観察時間は1年生：53.28～191.19秒、平均95.76秒 2年生：41.1～139.13秒、平均91.85秒と2年生のほうが短時間に多くの場所を観察し、観察部位は<全体>、<顔周囲>、<枕元>、<上半身>など7部位あり、1・2年生のどちらも頭側を長く観察している傾向があった。発話内容からの観察部位は1年生が79個・20部位、2年生が155個・26部位で2年生に観察内容に行動の目的や判断、疑問の表現を含んだものが多くみられた。

## 平成22年度事業活動報告書

# 「学術研究及び学術研究体制・研究助成に関する事業」

## 研究セミナー第二部

日 時：平成22年10月2日（土）13:00～16:05

場 所：東京ガーデンパレス

担当理事：島内 節、野川 道子、飯田 加奈恵

## プログラム

## 第二部 研究費獲得と研究環境づくり

## 1. 「私立看護系大学の民間研究費獲得の現状：

## 教員へのアンケート結果報告」

講師：国際医療福祉大学小田原保健医療学部  
看護学科長 島内 節

## 2. 「民間研究助成公募要領と研究費獲得のためのポイント」

講師：千代田健康開発事業団事務局長 喜多栄二氏  
明治安田厚生事業団事務局長 三橋由美子氏  
大川情報通信基金事務局長 前川博樹氏  
フランスベッド・メディカルホームケア  
研究助成財団事務局長 高巢勝則氏  
三菱財団常務理事 野淳二郎氏  
ファイザー・ヘルスリサーチ振興財団事務局長 廣田孝一氏

## 3. 「全体質疑・討論」

座長：北海道医療大学看護福祉学部長 野川道子  
国際医療福祉大学小田原保健医療学部  
看護学科長 島内 節



## 概要

1. 私立看護系大学の民間研究費獲得の現状：  
教員へのアンケート結果報告

日本私立看護系大学の教員ならびに研究員を対象に、民間研究助成金の申請状況と採択状況、および獲得額について調査を行った結果とそこから得られた示唆についての報告を行った。調査は平成22年7月12日～8月13日に、本協会のホームページ上で実施したもので、336人より得られた結果の分析を行った。

対象者の特性としては、助教（24.1%）、講師（19.3%）の順で多く、民間研究助成金の申請を行った人は31件であった。このうち採択した割合は11件（35.5%）と高かった。助成金額別の採択件数で最も多かったのが、99万円以下で、少額の助成の採択率が最も多く、助成額が高くなると採択件数も少ない状況であった。研究者の専門分野別の助成金の申請に関しては、精神看護、在宅看護、老年看護、地域看護の順で多く、採択件数をみると、基礎看護、小児看護、成人看護、老年看護が高かった。

これらの結果より、私立看護系大学・短期大学において、民間研究費獲得を高める条件として、次の4点にまとめることができる。第1に研究費申請は、職位によって申請の可能金額と採択率を考えて選ぶ必要がある。第2に共同研究者を持つことは、研究の広がりや深まりが増すという点から、必要と考えられる。第3に、各大学・短期大学で、研究費の情報提供について十分にされていない可能性がある。研究費に関する情報提供の支援を強化する必要があると考えられる。最後に、研究費採択のためには、多くの研究者が助成金申請を積極的に行うことが重要と考えられる。

## 2. 民間研究助成公募要領と研究費獲得のためのポイント

看護研究に関連する研究助成事業を行っている、民間研究助成財団より6名の講師を招き、それぞれの研究助成事業の理念、応募内容、採択につながるポイントについて講演ならびに質疑応答を行った。各財団が共通して研究助成採択につながる方法として、まず、研究助成の応募内容の把握の重要性を述べられた。応募内容については、各研究助成財団のホームページ上に掲載されているので、こまめにチェックし、応募資格や締め切り時期、応募している研究課題内容に留意し、申請を行うことが必要である。



## 3. 民間研究助成に関する質疑・討論

質問1：「千代田健康開発事業団の応募資格にある、若手対象者というのは、具体的にどのように判断するのか」

回答1：「教授や役職の方以外の教員、研究者、大学院生で、准教授までを想定している」

質問2：「共同研究者を含む場合、ファイザー・ヘルスリサーチでは、共同研究者の選択が適切かの基準もあるというが、適切性の判断はどのようにするのか」

回答2：「同教室内で、共同研究者を募ることはできない。教室が違えば、看護職者を共同研究者として名前を入れることは可能である。ただ、ヘルスリサーチの特色を考えると、看護、医療、法学、教育などの他分野と共同で研究を行うのが望ましいと考える」

質問3：「対象者の母体が大きいが採択されやすい傾向にあるが、看護のように質的研究を行う場合は、採択は難しいのか」

回答3：「量的研究の場合は、対象人数が少ないと、得られた結果の妥当性のうえで、採択は難しい状況にある。ただ、質的研究については、事例数が少ないといっても、研究の独自性が位置づけられ、研究経過が説明できれば、研究の価値があるので、採択が難しいとはいえない」

### セミナー参加者のアンケート結果

#### 1. 第一部

##### 1) 発表演題数について

適切；92.5%、少ない；3.8%、多い；3.8%

##### 2) 発表演題時間について

適切；73.6%、短い；17.0%、長い；9.4%

#### 2. 第二部

##### 1) 教員アンケート結果報告

とても満足；20.3%、満足；55.9%

やや不満；15.3%、不満；8.5%

##### 2) 民間研究費財団の講演

とても分かりやすい；31.7%、

分かりやすい；63.5%

やや分かりにくい；3.2%、

分かりにくい；1.6%

#### 3. 自由記載

・開催時期は、若手教員も自由に参加できるように大学の夏休みに設定したほうが、有効のように思われる。

・研究成果の発表はとても興味深く、研究活動へのモチベーションが高まった。民間研究事業団の説明はとても分かりやすく、このように支援してくれていることに感謝している。

・今後もこのような研究費獲得や論文発表に関する（投稿までのアドバイスなど）セミナーを開催してほしい。等

（文責：島内 節）



## 平成22年度事業活動報告書

## 「会報・出版等の広報に関する事業」

東海大学看護学部 溝口 満子  
愛知医科大学看護学部 土井 まつ子

## 平成22年度 出版物に関するアンケート調査結果

本協会では、出版物を協会から会員校または会員個人に郵送するとともにホームページ（以下、HPと略す）上にも掲載している。今回、HPをリニューアルすることによって、見やすさの向上と共に情報を迅速に伝達することが可能となってきた。今年度は出版物のペーパーレス化を中心に出版物の提供方法について検討することとした。そこで、出版物等の提供方法に関する各大学の希望について、平成22年8月から9月の期間にメールによるアンケート調査を実施した。

## 2. 調査方法

- 1) 対象：会員校の代表者（1校に1名）から回答を得ることとした。
- 2) 回収方法：事務局から各大学の担当者メールでアンケート調査用紙並びに回答を送付し、事務局に返信を依頼した。
- 3) データの取り扱い：得られたデータは、学校名が特定されないように事務局にて記号化し、事業担当者にて集計分析した。なお、本調査の結果は目的以外では使用しないこととした。

## 3. 調査結果

120校中89校（74.2%）から回答が得られたので、その結果を述べる。

## 1) 出版物の提供方法について（表1）

本協会から提供されている冊子等の出版物について、「①HPへの掲載でよい、②冊子を希望する、③その他の提供方法、④冊子で提供する場合の「希望冊子数」をたずねた。その結果、年報は、「HPのみでよい」は22.5%（20校）、「冊子を希望する」は73.0%（65校）であった。また、「HPと冊子を希望」は4.5%（4校）であった。会報では、「HPのみ」は29.2%（26校）、「冊子を希望する」は66.3%（59校）であった。「HPと冊子を希望」は4.5%（4校）であった。年報、会報とも冊子を希望する大学の割合が高い結果であった。

各種事業報告については、「大学における教育に関する事業」、「研究助成に関する事業」、「大学運営・経営に関する事業」、「関係機関との連携に関する事業」に分けて質問した。

冊子を希望する回答は、「大学における教育に関する事業」では52.8%（47校）、50.6%（45校）、「研究助成に関する事業」は50.6%（45校）、「大学運営・経営に関する事業」は52.8%（47校）、「関係機関との連携に関する事業」は53.9%（48校）であった。事業報告についても、約半数の大学は冊子を希望していた。また、「HPのみ」について記入していても、「HP+冊子を希望」の両方に回答した大学もあった。

表1. 出版物の提供方法について

	HPのみ		HP+冊子を希望		冊子を希望	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
1. 年報	20	22.5	4	4.5	65	73.0
2. 会報	26	29.2	4	4.5	59	66.3
3-①	39	43.8	3	3.4	47	52.8
3-②	40	44.9	4	4.5	45	50.6
3-③	41	46.1	3	3.4	45	50.6
3-④	39	43.8	3	3.4	47	52.8
3-⑤	38	42.7	3	3.4	48	53.9

- 3-① 大学における教育に関する事業（平成21年1月開催）  
安心・安全な教育環境の構築に向けて—情報モラルとセキュリティの観点から—
- 3-② 大学における研究に関する事業（平成22年1月開催）  
学士課程の看護研究授業における「論文のクリティーク」  
—論文タイプ別にクリティークを試みる—
- 3-③ 研究助成に関する事業（平成21年9月開催）  
研究助成成果発表・研究費獲得および研究環境の改善に向けて
- 3-④ 大学運営・経営に関する事業（平成21年7月開催）  
「私立大学を取り巻く環境」看護系大学経営状況等実態調査結果と今後の課題
- 3-⑤ 関係機関との連携に関する事業（平成21年5月開催）  
看護教育の本質を問う—国家試験の目指すもの—

## 2) 出版物の希望冊子数

出版物の希望冊子数をたずねた。回答欄に数の記載ではなく「教員数」や「会員数」で記載していた回答と10冊以上の数を記載していた大学は「教員数（会員数）」として集計した。

## (1) 年報および会報

年報を冊子で希望する大学は89校中の77.5%（69校）を占めていた。そのうち、「1部から5部」と回答した大学は59.5%（41校）、「教員数（会員数）」を希望したのは40.5%（28校）であった。一方、会報を冊子で希望する大学は89校のうち70.8%（63校）を占めていた。そのうち、「1部から5部」と回答した大学は65.1%（41校）、「教員数（会員数）」と回答した大学は34.9%（22校）であった。年報を「教員数（会員数）」と希望した大学は、会報も冊子で「教員数（会員数）」と希望している傾向がみられた。

## (2) 各種事業報告

ほとんどの大学は、各1～5部程度の冊子数を希望していた。「教員数（会員数）」を希望している大学は3校であった。

## 3) 本調査およびHPに関する意見（表2）

本調査およびHPに関する意見は15校からの意見があったので、詳細を表2に示す。記載内容は、ペーパーレスに賛成する意見、HPから過去のデータを見ることができる工夫、タイムリーな情報の配信、ウェブによる公開と冊子を希望する内容などであった。

## 4. 調査結果からの今後への示唆

以上の結果から、ペーパーレス化をすぐに実行するのは早計であることが分かった。当分の間、印刷したものの配布とHPへの掲載を並行させつつ、徐々にペーパーレスに移行してゆく。また、年報やニュースレターの送付部数は、一律50部ではなく、各校における教員数分を、その他の事業報告は5冊程度の送付が妥当であることが示唆された。

表2. 本調査およびホームページに関する意見

## [ペーパーレスに関して]

- ・できるだけペーパーレスでいいと思う。
- ・印刷に適したページ展開で文書を作成していただきたい。例えば、ページ内のレイアウトが崩れない形式（PDFファイル）、A4サイズで作られている等。

## [過去のデータを見ることができる工夫]

- ・印刷、郵送などできるだけ減らす方向でHPに公開していった方が良いと思う。その年度分だけでなく過去の分も見ることができるようにしてほしい。
- ・HP上、数年間は閲覧できるようにしてほしい。
- ・上記の出版物提出方法については、HPのみでよいと考えるが、単年度だけではなく、数年分（たとえば5年分）を閲覧できるようにしてほしい。担当者が交代したり退職した場合に、以前の資料を見ることができないことがあるので。

## [タイムリーな情報の配信]

- ・月に1回程度メールなどでトピックやお知らせなど担当者に送付し、会員に送付してもらうなどしてHPの視聴者を増やすようにしたらどうか。
- ・学内で資料・冊子で回覧するより、「HPを参照下さい」とタイムリーに情報提供するほうが利用しやすいと考える。
- ・年報・会報等の件、HPのみでよいと思う。この出版回数であれば、その年度の年報・会報がHPにアップされた旨について、その都度各教員にメールで連絡して頂ければと思う（いつ出版されたのか、および内容について確認しないままに終わってしまう人が多くなる可能性があると思う。）
- ・ウェブ（HP）上のみでの提供になった場合は、各大学にウェブに掲載した旨を通知（メール可）いただけると有難い。

## [ウェブによる公開と冊子の希望]

- ・今まで、各種セミナーの報告書は、報告と回覧をした後、教員全員に周知できるように、人数分をカラーコピーして配布し、手間暇かけていた。今後教員分が郵送されたらそのまま配布するだけなのでずいぶん助かる。平成22年度分からは、「ウェブ（HP）+冊子」をお願いしたい。
- ・セミナー報告書は、ご案内と同様にHPで良いと思う。

## [出版物として冊子の希望]

- ・年報と会報は、内容をじっくり読みたいため、従来通り冊子を希望する。
- ・出版物に関しては、従来通りでお願いできればと思う。HPは、とても見やすいと思う。

## [その他]

- ・今後、ペーパーレス化の進展に伴い、協会年会費の値下げ等もご検討いただければと考える。
- ・セミナーなどの参加者に報告書がほしい。（2件）
- ・教員名簿の掲載順を提出した原稿のまま公開していただきたい。

## 加盟校のユニークな取り組み〈新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科〉

# 『思いやりのこころ』を育てる教育

私たちの大学は1学部2学科（看護学科と福祉心理学科）、1専攻（修士課程）からなり、加えて認定看護師研修センターが設置されています。大学は創立12年目を迎えたところですが、設置母体である新潟青陵学園の創立はなんと1900年です。

2010年春卒業生は保健師6人、助産師15人、看護師65人、養護教諭4人でした。医療や福祉の現場で活躍するためには、実践的な知識と技術に加えて、それに血を通わせる『思いやりのこころ』を持つことが最も大切であるという理念のもとに教育を行っています。

### 1. 仲間とつながる初年次教育

小規模大学の特性を生かし、入学時オリエンテーションキャンパスに両学科合同で参加し、先輩主導のセッションを共にこなしながら仲間作りをします。初年次教育プログラムは、少人数制のゼミ方式で行い、学生間の、または教員との距離の取り方を体験しながら、対人関係スキルと大学で学ぶための基本スキルを修得します。同時に、学生約10人に教員1人のアドバイザーを配置し、アドバイザーグループ（通称アドグル）毎の交流を図っています。

### 2. 看護の現場に立つ者としての思い

『思いやりのこころ』を学ぶ場として欠かせないのは、看護学科特有の臨地実習です。実習施設に生まれ、受け持ち患者さんの多くは重大な健康問題を抱えています。学生相手を引き受けて下さいます。その重さを理解し、学生なりに準備を開始します。学生が「思いやりのこころ」を意識するのは、未熟な看護技術や対応で患者さんに迷惑をかけてしまわないかという思いを抱く時です。知識面の準備に不安はありますが、技術面の練習を熱心に行い、休暇中も看護技術を練習する学生が絶えません。先輩から後輩に、実習に向けたメッセージを伝授し、患者さんの前に立つ者としての「こころがまえ」を受け取ります。

### 3. 卒業前技術演習と「多重課題」

第1回卒業生から卒業直前の学生を対象に基本的な看護技術の習得を目標とする看護技術演習を約1週間行い、職場への適応を支援しています。しかし、卒業生が職場で戸惑うのは、一つ一つの技術の未熟さだけでなく、複数患者を受け持った場合の段取り、業務の優先順位を考えた行動など、業務遂行能力の欠如が原因です。そこで、卒業直前の看護技術演習の一環として、複数患者を受け持ちシミュレーションする「多重課題演習」を企画・実施しています。

学生は3時間の演習にトライします。4人分の患者情報から1日の行動計画を考えてワークシートを作り、計画した内容をリーダー役の教員に報告してアドバイスを受けます。業務遂行にあたって必要な準備である輸液のミキシング、注射の準備、検温に必要な物品の準備などを行い、下級生の模擬患者を援助します。この中で予定されていた看護業務のほかに、模擬患者役の下級生からの予期せぬ質問、反応、訴えに遭遇する体験が組み込まれています。その後、模擬患者のコメントを聞き、リーダー役教員から講評を受けて終了します。

この多重課題を通じて、学生が実感する事は、「あらかじめ段取りを考えておく必要性がわかった」、「ひとつの援助の前には常に準備が必要であること」であった。そして、あらためて強化の必要な能力と判断し、2010年度から「多重課題」の演習を組み込んだ臨床看護技術の科目を新設し、複数患者を受け持つ実習も2011年度から開始します。

副産物として、下級生が模擬患者を引き受けることで、卒業時の到達レベルを目撃して衝撃を受けます。右往左往する先輩の必死な姿は、卒業までの時間の持つ意味を再確認させる機会になっています。

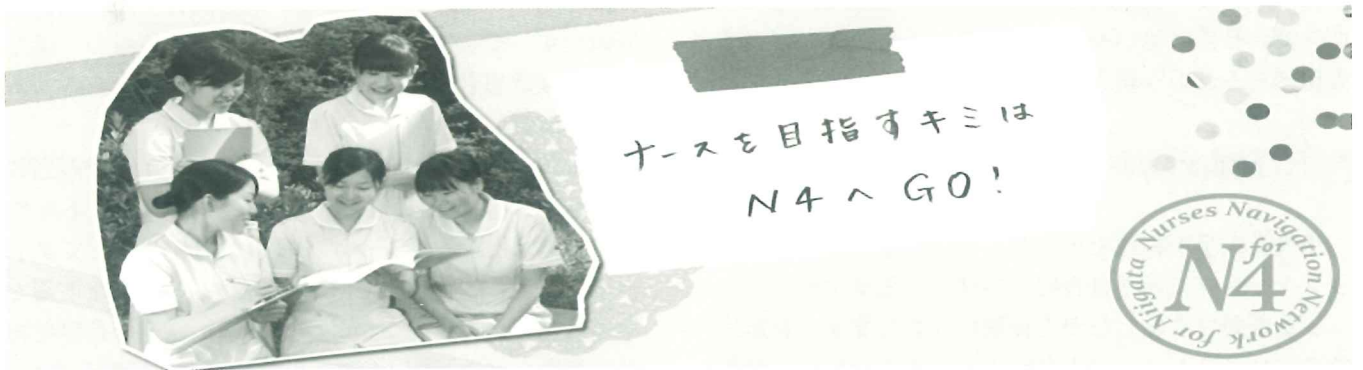
『思いやりのこころ』を体現できる卒業生に育ってほしいと、今後もバージョンアップしながら特訓は続きます。別に、保健師と助産師、養護教諭のためのプログラムも設定して、社会に送り出しています。

#### 4. ボランティア活動でこころの触れ合い

2008年度から現代GPとしてメンタルフレンド活動が始動し、病院や学校、児童福祉施設の子どもの遊び相手や学習支援活動を通じて、常に子どもたちの思いに寄り添うことに集中した活動をしています。行事の企画も行い、学年や学科の枠を超えた学生間の交流が生まれます。運営はボランティアセンターが行い、臨床心理士が常駐してボランティア活動の基本を伝えると共に、時にティータイムで学生のこころの充電を図っています。対人関係の苦手な学生にとっては、相互信頼の関係を確認する場所でもあります。



#### 5. 看護を目指す次世代に思いをつなぐ取り組み



2009年度から文部科学省戦略的大学連携事業として、新潟県の若年層の人口流出を防ぎ、次世代を担う人材の確保と養成のため、本学が代表校として共生型大学連携をスタートさせました。特に、将来的な看護職の人材不足解消を大学間タスクフォースで対応するため、看護学科のある新潟県内4国公立大学と新潟県が連携し、包括的施策として、在学生、卒業生、中高生、地域社会などに対して「エンロールメント・マネジメント」の手法を取り入れたキャリア教育・形成・支援事業を推進しています。

また、この取り組みは新潟青陵大学に限らず、新潟県内の大学・短大の多くが加盟し、連携して教学・経営両面での効率化と相乗効果を生み出す取り組みを行い、地方における高等教育機関の新しいモデルを作り上げようと『コンソーシアム』を立ち上げました。大学が個性を伸ばしつつ、共生的連携の中で大学及び教職員の質を向上させる活動に取り組んでいます。写真は、「看護の魅力・看護への道」イベントの様子です。

(文責：本間 昭子)



## 加盟校のユニークな取り組み〈吉備国際大学〉

## 医療・福祉領域の連携スキル学習プログラム

## はじめに

本学は、平成2年に社会学部単科大学として岡山県高梁市に開学し、平成7年には、保健科学部と社会福祉学部が増設された。

これら2学部の教員有志で検討が始まった「保健医療福祉の連携」をテーマとした研究が発展し、平成20年度「質の高い大学教育プログラム」(教育GP)に採択されたのが「医療・福祉領域の連携スキル学習プログラム」である。

このプログラムは、本学の看護・理学療法・作業療法・社会福祉各学科の専門職者養成課程において、連携力の養成を強化することを目的としている。

## 1. 取り組みの過程

今年度、GPとしての最終年度を迎えたので、これまでの取り組みを紹介させていただくが、紙面の都合上、合同演習を中心に報告したい。

最初の2年間は、国内外の取り組み状況に関する情報収集や実地調査を行うとともに、呼びかけに応じた学生有志を対象に、試行的に体験型演習を行った。この演習には、教員のみでなく、学外の福祉施設関係者などの協力も得た。

このような準備期間を経て、正規の授業に取り入れることになり、授業としては2年生の共通科目である「キャリア開発Ⅱ」(選択科目)の中の5コマを使って、昨年秋に合同演習を行った。演習は、参加学生数と教室の関係等から、2度に分け、各回とも土曜日の5コマを使って行った。

また、実際に多職種連携が必要になる場面について、福祉施設の職員を対象にインタビューやアンケート調査を実施し、①お年寄りがお飯を食べない、②お年寄りが家に帰りたくないという、など7つの場面を想定して、ロールプレイを行うこととした。

## 2. 合同演習の流れ

今年度は、諸事情により理学療法学科が参加できず、2回合わせて3学科90名(うち看護学生47名)が参加した。また、指導スタッフは教員の他、卒業生の



合同演習風景1

実践者や大学院生なども加わって、2回で延べ56名が担当した。

ロールプレイは、6～8名のグループ別に行い、学生は、利用者・援助者・他職種を体験できるよう、場面ごとに交代する。

各回とも、以下のような流れで演習を行った。

## 1限：オリエンテーション

日程や心構え等の伝達の他、アセスメントシート記入、看護・作業療法・社会福祉3学科の教員によるミニ講義が行われた。

## 2限：ロールプレイⅠ－高齢者への声かけ－

主援助者が、利用者へ声かけし、情報収集・関係形成・主訴確認・見立てなどを行う。

## 3限：ロールプレイⅡ－他専門職との連携－

主援助者が、他職種に対して情報提供し、連携に関する話し合いを行う。

## 4限：ロールプレイⅢ－連携の流れ－

これら一連の流れを、メンバーが交互に専門職者、高齢者、観察者を担い、相互の観察も行いながら、どのように声をかけるべきか、自分の専門性からのふさわしい支援や役割等の検討をしながら演じる。

## 5限：グループディスカッション・発表

各グループで話し合った結果を発表し、実践者や学内教員からの最終的な講評とアドバイスが行われた。

指導スタッフとして、実践者が加わったことにより、コメントと併せて「模範演技」も見せてもらえるなど、学生にとって貴重な経験となった。

### 3. 学習成果

参加学生からは、肯定的な感想が数多く寄せられた。例を挙げると以下のようなものである。

「専門性が異なると、視点が異なるので、自分の職では必要ない情報でも、他職種が必要としている場合があることがわかった」、「他職種との信頼関係に気づくことが大切と感じ、そのためには、お互いを知り、専門知識を学ぶことが大切と感じた」、「実際に経験することは本当に大切だと思った。これを実習に生かしていきたい」等々。

一方、「連携の難しさ」を感じた者は演習前よりむしろ増える傾向があり、実際に経験することで、事前に漠然と想像していた以上の困難さを実感したのであろう。そのような意識の高まりは重要な気づきでもあり、学生たちは貴重な経験をしたと考えられる。

参加教員からも「医療福祉の他領域の学生同士の交流と、それぞれの専門職の理解が進んだ」、「他の専門学科と共通の演習をすることで、自らの専門について理解し、同時に、他の専門に関しても理解することにつながる」といった感想が寄せられた。学科や専門領域を超えて、教員が協力したことも、本学にとって画期的と言ってもよからう。



合同演習風景 2



合同演習風景 3



合同演習風景 4

### 4. 今後の課題

来年度、学部再編により、保健科学部3学科と社会福祉学科が統合されて、保健医療福祉学部として生まれ変わる。この新学部の4学科すべてが、正規の授業として合同演習に参加することになっている。これは新学部の「目玉」の1つと言ってもよからう。

しかしながら、多数の学生（140名程度を想定）を一堂に集めて演習を行うことは、場所の確保、時間割の調整、教員や指導者の確保、物品の確保等々、数多くの課題を克服しなければならず、これまでの経験で得られた成果を生かすこととともに、現在検討を進めている。



研修会に於ける高梁市地域包括支援センターの  
倉橋重昭氏（卒業生）による講演の様子

### 終わりに

本稿は、教育GP代表者の横山教授や推進メンバーの加藤教授の発表資料など、多くの関係者の文章を引用させていただいたことを、お断りしておくとともに深謝いたします。

この取り組みの詳細に関しては、以下のホームページを参照されたい。<http://kiui.jp/pc/kyougup08/>

（文責：看護学科 尾瀬 裕）

# 事務局からのお知らせ

## 平成23年度 研究助成 応募受付中

応募メ切は5月15日（土）です。（当日消印有効）  
 なお今年度から若手研究者研究助成についてのみ、  
 加盟校代表者による推薦書が不要となりました。  
 詳細は、協会ホームページ<http://www.spcnj.jp/>を  
 ご覧下さい。

■問い合わせ先：03-5879-6580

メール：jpnpcs@jade.dti.ne.jp

■送付先：

〒162-0845

東京都新宿区市谷本村町3-19 千代田ビル405

一般社団法人 日本私立看護系大学協会事務局宛

## 平成23年度 総会のお知らせ

■日 時：平成23年7月8日（金）11：00～18：00

■場 所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25

※午後の講演会 演題未定

## 平成23年度 講演会のお知らせ

■主 催：教育、学術および文化の国際交流事業

■日 時：平成23年9月27日（火）13：30～16：30

■場 所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

■テーマ：国際的な看護教育の潮流

講演1. 「経済連携協定に基づく外国人看護師導入  
 のその後」

平野 裕子 教授（九州大学）

講演2. 「国際的な視点から見た日本の看護教育制度」

松谷美和子 教授（聖路加看護大学）

## ホームページのリニューアル

ホームページがリニューアルされました。  
 セミナーの申込等もホームページから直接できるようになりました。どうぞご活用ください。

<http://www.spcnj.jp/>

The screenshot shows the homepage of the Japan Society of Private Colleges and Universities of Nursing. At the top, it features the organization's name in Japanese and English, along with a logo. Below this is a navigation menu with categories like 'Organization Overview', 'Affiliated Schools', 'Activities', and 'Member Login'. A central banner image shows two people smiling. Below the banner is a section titled '事務局からのお知らせ' (Notice from the Secretariat) with a list of recent news items, including an announcement about a survey and a seminar. At the bottom, there is a footer with contact information and a copyright notice.

## 原稿募集

### あなたの学校をアピールしてみませんか

#### 募集1. 加盟校のユニークな取り組み

##### 内容

大学として取り組んでいる、学生や教員あるいは地域の人たちを対象にしたユニークなプログラム。

##### 原稿

2000字程度  
(写真400字換算を含む)

#### 募集2. 我が校の国際交流プログラム

##### 内容

学生・教員を対象とする海外交流プログラムについて、その内容と参加者のレポート。

##### 原稿

2000字程度  
(写真400字換算を含む)

原稿にはできるだけ活動中の写真を含めてください。

#### 募集3. その他

トピックスや会員校間で共有したいニュースがありましたら、お知らせください。

#### 原稿発送先

添付ファイル(テキストファイル)にて下記の事務局メールアドレスに電子メールでお送りください。

#### 原稿掲載

原稿は順次掲載致しますが、掲載時期については広報担当者にご一任ください。



### 編集後記

大学全入時代が到来したと言われている昨今、「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」では、学士力の確保に向けた課題として、目的意識の希薄化、学習意欲の低下した学生も含めた多様な学生への対応、当該大学の学生に即した学習成果の具体的な達成水準等を主体的に考えていく必要性などが検討されています。

年々増加する看護系大学の中であって、120校(平成22年7月現在)が加盟する日本私立看護系大学協会の看護及び看護学教育・研究の発展に果たす役割は非常に大きいといえます。

今回の会報25号には、平成22年度の事業活動から、大学教育・看護学教育の質保証のあり方をテーマにした企画、研究費獲得に向けた支援、若手研究者の意欲的な研究の成果、広報活動を効果的に行うためのアンケート結果を掲載しました。また、会員校のユニークな取り組みとして、2校の効果

的な教育方法をご紹介させていただきました。

本号の発刊に当たり、ご多忙中、原稿の執筆を快くお引き受けくださいました諸先生方に感謝申し上げます。会員校の皆さまには、各々の建学の精神のもと、平成24年度開始に向けて看護学基礎カリキュラムの準備を急がれていることと思いますが、会報に関して今後とも忌憚のないご意見やご要望を編集委員会にお寄せいただければ幸いに存じます。

なお、本号の編集中に東日本大震災が発生したため、今回は校正を編集委員会でさせていただきました。不行き届きの点はご容赦ください。被害に遭われた会員校、会員の皆さまに心からお見舞い申し上げますとともに、息の長い支援が続けられればと切に願っております。

(愛知医科大学 八島妙子)

#### 日本私立看護系大学協会会報 第25号

発行者：日本私立看護系大学協会 <http://www.spcnj.jp/>

〒162-0845 新宿区市谷本村町3-19 千代田ビル405号室

TEL 03-5879-6580/FAX 03-5879-6581 E-mail [jpnecs@jade.dti.ne.jp](mailto:jpnecs@jade.dti.ne.jp)

編集責任者：八島妙子 溝口満子

#### 編集

愛知医科大学看護学部

大野弘恵 水谷聖子

東海大学健康科学部

石井美里 森祥子

印刷所 山菊印刷株式会社